

## 看護職部門

# 涙で濡れた枕

すがなか さつき  
【菅中 沙都姫・福岡県】



優秀賞

「綾田さん宛てに手紙が届いてるよ!」。夜勤明け、事務員から手渡された細長く白い封筒には、1枚の写真と1枚の便箋が入っていました。私は写真を見た瞬間、急に胸と目頭が熱くなったのを覚えています。その写真には、高校の卒業証書を手にした青年が最高の笑顔で写っていました。

私とその青年と出会ったのは約1年前、当時勤めていた整形外科の病院でした。そこへ救急車で運ばれてきたのが、まだ高校2年生の彼だったのです。整形外科に救急車が入ることは滅多になく、私は同僚たちと「何ごと?」と、処置室に運ばれてきた彼を見ました。ベッドの上には、紺色のブレザーにチェックのズボンを着た彼が横たわっていました。ただ、チェックのズボンは激しく破れ、その隙間からは息を飲むほど損傷の激しい足が見えていたのです。交通事故でした。

彼の緊急手術は7時間程度で終わり、その数週間後から義足生活が始まったのです。まだ高校2年生の彼にはつらすぎる現実なのに、彼は毎日面会に来る両親や友人、私たち看護師にも笑顔でした。しかし、一度だけ本心を見せてくれました。

その日、私は彼の部屋担当で、血圧を測り、他愛もない会話をし、最後に「何かありましたらコールを押してください」、そう言って退出しようとしたら「…足を下さい」と小さな声で言ったのです。振り向くと、彼は枕に顔を押し付け、必死で声を殺しながら泣いていました。泣きたくて、泣きたくて、ずっと我慢していたのだと知り、私も涙が止まらず声を殺して泣きました。そして、「泣きたい時は泣いて良いんだよ、我慢しなくて良いんだよ」と小さく言いました。すると彼は大きな声で泣きだし、涙で枕はびしょ濡れでした。

便箋には「無事卒業しました。義足にもだいぶ慣れ、俺は元気です!!」と。大きな文字で書かれていました。